

キ』などがある。

- (注8) 陸井三郎『ハリウッドとマッカーシズム』筑摩書房、1990、がこの問題について簡潔に述べている。
- (注9) 紀田順一郎他『ニッポン文庫大全』ダイヤモンド社、1997年、180頁、近藤健児『絶版文庫交響楽』青弓社、1999年、70頁などにも指摘がある。
- (注10) 新潮文庫版は、平成元年5月の40刷の折に改版が行なわれており、この時にタイトルの統一が図られたのであろうか。改版に際しては、一行の文字数を43字から41字に減じたり、ルビを増やすなどの機械的な改訂が行なわれたほか、訳文にも多少手が入れている。例えば、その一部がフィッツジェラルドの墓碑にも記されている、小説の大尾の部分が、旧版では「— あすは、もっと速く走り、両腕をもっと先までのぼしてやろう……そして、ある美しい朝に — こうしてぼくたちは、絶えず過去へ過去へと運び去られながらも、流れにさからう舟のように、力のかぎり漕ぎ進んで行く。」とあるが、新版では、下線部が「いつの日にか」と改められている。
- (注11) 同じ文庫の場合でも、増刷の際に、写真が差し替えられる場合がある。手許にあるもので例を挙げておく。角川文庫の『禁じられた遊び』1972年の9版では、犬の死骸を抱くポーレットの姿がカバーの表紙に使用されている。これが1977年の25版になると、旧版ではカバー裏表紙に使用されていたポーレットとミッシェルの写真が表紙に廻り、犬を抱く姿の写真は削除されている。実は、ポーレットとミッシェルの同じ写真は前袖の3葉の写真の最上部に全く同一の物が使用されているので、カバーを改めるに際して、その写真と差し替えることも出来たはずである。それをしなかったのは、やや残酷な印象を与えるこの写真を避けようとしたものであろうか。
- (注12) 同じ、ダニエル・デイ・ルイス主演の『エイジ・オブ・イノセンス』の公開に合わせて、ウォートンの原作が、伊藤整以来約半世紀ぶりに新訳（新潮文庫、1993年、大社淑子訳）の刊行となった例などがある。
- (注13) 1999年3月より明春まで全国七箇所で行なわれている「絵本の100年展」でも、当然ワイエスは取り上げられており、会場の解説でも図録でもこの作品のことは言及されていたが、展示作品は「宝島」などのみであったのは残念であった。
- (注14) キャシーと言い間違えるともっと大変なことになる。灰皿ぐらいは飛んで来るかもしれない。映画『キャリー』参照。猶、ドライサーの原作にはないが、映画『黄昏』では、キャリーと再会したドルーエが誤って「サリー」と呼びかける場面がある。
- (注15) 石ノ森章太郎は、同作の章題として「地上より永遠に」を使用している。
- (注16) 『武器よさらば』『ガラスの動物園』等が本書では取り上げられているので、これに『地上より永遠に』が加われば、まるでジル・チャーチルのミステリ（『毛糸よさらば』『クラスの動物園』『地上より賭場に』）の引用のようになってしまう。
- (注17) 亀井俊介『アメリカン・ベストセラー小説38』丸善ライブラリー、1992、の巻末のリストによる。猶、映画の日本公開時のパンフレットによれば、既に全米で300万部を超え、11か国語に翻訳されているとある。

一時期は、社会現象とまで言われた『ポケット・モンスター』の人気は、国の内外を問わず相変わらずの様である。1997年秋頃と記憶するが、「コイルは電気ネズミの夢を見るか」というタイトルの話が、テレビで放映されたことがある。電気ネズミとは同作品の中では最も有名なピカチュウというキャラクターであるが、このタイトルが「アンドロイドは電気羊の夢を見るか」のもじりであることは、言うまでもない。勿論、主たる視聴者である子供たちには分からないであろうが、その子供の両親や、比較的年の離れた姉や兄には理解できたのではないか。それらの人々に対しての番組製作者からの、しゃれたメッセージと受けとめて良かろう。このようなやりとりが可能であるほどこの作品が広く普及しているのである。

映画の結末近く、レプリカントのロイは「われわれはどこから来て、どこへ行くのか」というような言葉を発するが、この問いは、古今東西の文学の最大の主題の一つでもあることに思いをいたしながら、映像と文学との間を彷徨った、この文章を終えたいと思う。

(1999年9月稿)

注

- (注1) ウィノナ・ライダーとクレア・デーンズは『キルトに綴る愛』でも血縁の女性を演じているが、ここではウィノナ・ライダーが主人公の女子大生であるのに対して、クレアはなんとその大叔母（ただし回想シーンではあるが）を演じている。
- (注2) 「エリサベス・テラーなんかこわくない」の原題は「Who's Afraid of Elizabeth Taylor?」で、明らかにオールビーの作品を意識している。猶、相前後して翻訳がなされたものに『リズ』C・D・ハイマン、1996年、読売新聞社刊、があるが、ゴシップの扱い方などにやや陰惨な印象を与えられるものである。
- (注3) 美貌という点ではやや異論もあるかもしれないが、ジュリー・ハリスの清純さがこの映画の大きなポイントであるのは、監督エリア・カザン自身の言にもあるが（『エリア・カザン自伝』朝日新聞社刊、下巻162頁）、この映画を見る誰もが共通して持つ印象であろう。
- (注4) 1969年10月、1972年9月。雄鶏社1977年5月刊『淀川長治の日曜映画劇場』巻末リストによる。
- (注5) 最近市販されているビデオ・ソフトでは、パラマウント版も「武器よさらば」の題にしているが、これなども混乱の原因であろう。筆者の眼にふれたものだけでもFDL版（14HW-5001）とIVC版（IVCV-3521S）の二つがある。邦題をもう少し慎重に扱わねばならぬ問題については、「黄昏」の項目参照。
- (注6) 「ヘミングウェイと映画」『本の本』2-7、1976年7月。
- (注7) ちくま文庫は、本書のように、今日では入手困難となったサンリオ社、サンリオ文庫の作品を再刊していることが注目される。ほかにも『ザ・ベスト・オブ・サ

が、まさに奇跡的な復活を果たした感があるのが、この作品である。夜明の街をバイクで走るナタリーの姿は、そのまま長い夜を見事に乗り越えたパティ・デュークの姿と重なりあって、感動的なラスト・シーンであった。アル・パチーノが、ゴッド・ファーザーに先立って、この映画の冒頭近くでナタリーのダンスの相手役という端役で出演しているのも映画史的には注目される。60年代後半の風俗が色々と描かれているのも、今となっては参考になろう。音楽は、ヘンリー・マンシーニ。60年代の映画音楽は「ムーン・リバー」「酒とバラの日々」で始まり、「ロミオとジュリエット」「ナタリーの朝」「ひまわり」で締め括られたのである。

映画のシナリオが先に出来上がり、小説の方は後を追う形で執筆されたのであるが、こちらも作品としては大変面白く、福岡市内の短期大学の英文学科のテキストにも採用されたことがあると仄聞する。恐らく教材としても適切であったのであろう。

翻訳は、角川文庫。今日では、品切れであるのが残念である。当時の角川文庫は、映画の制作・公開にあわせて、いち早く原作を文庫の形で提供していた。この『ナタリーの朝』が刊行された1970年には『ジョンとメリー』『裸足のイサドラ』『小さな巨人』『Z』、翌年には『チャイコフスキー』『いちご白書』『ジョニーは戦場へ行った』を刊行、翌々年には『ある愛の詩』『死刑台のメロディ』と、角川文庫は当時の映画の話題作を網羅した感があった。ツルゲーネフの『貴族の巣』が、イリナ・クプチェンコの美しい写真のカバーで再刊されたのも、映画公開にあわせてのことであった。こうして並べてみると、映画も原作も共に、今日では及びもつかないほど、高水準であったことが分かる。角川文庫はこのころ名作として評価の定まった映画の原作の刊行も平行しており(70年『禁じられた遊び』71年『太陽がいっぱい』72年『ブーベの恋人』『ウエストサイド物語』)、とにかく角川文庫のコーナーに行きさえすれば、話題の映画の原作が手に入るのは便利であり、そういう点においては、老舗の新潮文庫でも叶わなかった。

(10) 『ブレード・ランナー』

最後に、フィリップ・K・ディックの、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』を、1982年にリドリー・スコット監督が映画化した『ブレード・ランナー』を取り上げておきたい。主演は、ハリソン・フォード。本書には、『コンタクト』が取られているから、SF作品も一つ加えたいのである。折も折、ハン・ソロは登場していないものの、『スター・ウォーズ・エピソード1』が評判であることからの連想でもある。

れてほしいものである。彼の役は、ジョージ（モンティ）のかつての恋人アリス（シェリー・ウィンタース）の死因に疑問を持って調査を行ない、次第にジョージを追い詰めて行く検事であり、後年の『ペリー・メイスン』や『鬼刑事アイアンサイド』の役を予感させるような演技ぶりであるからである。モンティは、この作品で、美貌の富豪の娘と結婚することによって「陽のあたる場所」を目指すのであるが、本作品の直前に、同じパラマウント社の『女相続人』でも、女主人公の財産目当てに近づく青年の姿を好演している。

(8) 『アラバマ物語』

60年代前半を代表するものとして、この作品を挙げたい。ハーパー・リーの原作の『To Kill a Mockingbird』は、1961年度のピューリッツァー賞を獲得したロング・セラーである。1965年までのアメリカン・ベストセラー小説のランキングによると500万部以上を売り上げ、『ライ麦畑でつかまえて』などを押さえて第10位に食い込んでいる^(注17)。日本では、菊地重三郎の翻訳が暮しの手帖社から出版され、こちらも1996年の段階で32刷を重ね、息の長い支持を得ている。

映画化は、主人公の弁護士アティカス・フィンチにグレゴリー・ペック（アカデミー主演男優賞）を起用、語り手でもある長女のスカウトにはメリー・パダムという少女が扮しなかなかの名子役ぶりを見せている。グレゴリー・ペックは、やはりピューリッツァー賞の原作を映画化した「子鹿物語」で1946年度のアカデミー主演男優賞にノミネートされたのをきっかけにスターダムにのしあがったが、その後「頭上の敵機」「ローマの休日」などの話題作、ヒット作を経て、最終的には、「子鹿物語」と同じ傾向のこの作品でオスカーを手にするあたりは、いかにもこの人らしい律儀さであるといえようか。

翻訳の『アラバマ物語』は、表紙にスカウトの可愛らしくも爽やかな写真をあしらひ、文中に挿入された映画のステール数葉も効果的であった。造本は、並製の全書サイズで、良書を安く提供し幅広く普及させようとする暮しの手帖社の姿勢が窺われて好ましい。

(9) 『ナタリーの朝』

一時期は、中学校の英語のテキストにも採用されていた『奇跡の人』（1962年、アーサー・ペン監督、アン・バンクロフト、パティ・デューク他、ワーナー）であるが、この作品でヘレン・ケラーを熱演し、アカデミー助演女優賞を獲得したパティ・デュークは名子役の名をほしいままにするが、その後パティ・デューク・ショーなどの番組を持っていたものの、やや伸び悩んでいた。そのパティ

(7) 『若き獅子たち』

『サイボーグ009』からの連想としては、当然『地上より永遠に』につながるはずであるが^(注15)、1953年度のアカデミー賞の大部分を制したこの作品は、幸いにも今日でも高い評価を得ていて、廉価版のビデオ・ソフトだけでも数種類が刊行されているので、同じ傾向の作品として、アーウィン・ショー『若き獅子たち』を取り上げたい。^(注16)

理由は三つある。一は、アーウィン・ショーは、常盤新平の功績もあって「夏服を着た女たち」「ニュー・ヨークは闇に包まれて」などの洒落た短篇が今日では最もよく読まれているが、このすぐれた長編小説はなかなか入手しにくい状況であった。幸いちくま文庫(1992年4月)に入ったので、この機会に取り上げたいのである。理由の二は、新訳の刊行のため今日ちょっとしたブームである『ユリシーズ』が、この作品では主人公の一人ノア・エッカーマンの持ち物として、重要な小道具であるからである。その三は、これが最大の理由であるが、原作と映画では、ノアの運命に決定的な相違がある。結末部分では、原作の厳しき、映画の救い、何れも甲乙つけがたく、このような作品も本書で取り上げてほしかったからである。

原作は、1948年刊、翻訳は映画化よりいち早く1952年に刊行(原本未見、ちくま文庫、解説による)、映画化は1958年、20世紀フォックスで、監督エドワード・ドミトリク、主人公の三人にマーロン・ブランド、モンゴメリ・クリフト、ディーン・マーチンを配した。マイケル・ホイテカーの役にディーン・マーチンを充てたために、原作よりかなり軽妙な人物となっている。これは『地上より永遠に』のフランク・シナトラを意識してのキャストであろう。ノア・エッカーマンは、原作の方が、モンティのイメージには一層近く、シナリオのせいも、モンティは『地上より永遠に』に比べると、十分にその力を発揮するに至らない。逆に、ディーストル・クリスチャンは、マーロン・ブランドの熱演で、映像の方に存在感があったような気がする。ただし、クリスチャンと友人ブランドとの関わりは、原作のぞっとするような結末のつけ方に軍配をあげたい。

猶、モンゴメリ・クリフトは、本書の『陽のあたる場所』『ミニ情報』の項目で、主演のモンゴメリー・クリフトとエリザベス・テーラーが「私生活においても本当に恋仲になっている」と記されているが、現実には極めて複雑であったようである。映画会社などでは大いに宣伝に利用したが、モンティの性癖から推しても、リズの性格から考えても、二人が最終的に結ばれる可能性は低かった。二人の関係については、従来様々にスキャンダラスに取りなされているところでもある。更に、同じ項目で、ペリー・メイスン役でも有名なレイモンド・バーについて言及しているが、そうであれば、当然、同作品での役どころに触

う点で記憶されるものである。ボギーとベティの運命的な出会いについては、ナサニエル・ベンチリー『ボギー』（石田善彦訳、晶文社、1980年）第6章に記されている。また、ベティの自伝『ローレン・バコール 私一人』（山田宏一訳、文藝春秋、1984年）は、共演予定者の名前を聞かされて「ケイリー・グラント——素敵！ハンフリー・ボガート——いやだあ！」と思ったことや、グレタ・ガルボとの出会いなどが、活写されている。

(6) 『ジャイアンツ』

次に、エドナ・ファーバーのベスト・セラーを映画化した『ジャイアンツ』を取り上げたい。1955年のワーナーの大作で、アカデミー作品賞の候補ともなった。監督が、ジョージ・スティーブンス、主演がロック・ハドソン、エリザベス・テーラー、ジェームス・ディーン、音楽がディミトリ・ティオムキンと、何拍子も揃った傑作である。映画史上にも残るこの作品であるが、制作から半世紀たった今日では、ジェームス・ディーンの遺作として人々に記憶されるものである。ジミーは、この作品では、ベネチクト家の牧童ジェット・リンクに扮し、見事な老役まで演じた。

因みに、漫画家の石ノ森章太郎が、代表作『サイボーグ009』の登場人物のうち、アメリカ人である002の名前を、ジェット・リンクとしているのは、この作品へのオマージュであると言えよう。002は、かつてニュー・ヨークでジェット団というグループに属していたことが作品中で描かれており、『ウエストサイド物語』を踏まえての人物造型であることは読者に分かりやすい形で示されているが、そのフルネームがジェット・リンクであることは、もう一つ別の引用が隠されているような気がする。002は、9人のサイボーグの中では、地上でも空中でも最も早く移動することを最大の武器とする。ジェームス・ディーンも又スピードに魅せられ、自身カー・レーサーとして、何回かレースに参加した経験も持つ。両者をつなぐキー・ワードはスピードであろう。では、何故、ジミーの三作品のうち『ジャイアンツ』が選ばれたのか。恐らくそれは、『ジャイアンツ』が、ジェームス・ディーン最後の出演作であり、撮影完了を待たずに、愛車のポルシェ・スパイダーで衝突死したと深く関わっていよう。ジミーはジェット・リンクという登場人物の仮面を永遠に脱ぐことが出来なくなったのである。このジェット・リンクという名前を与えることによって、謂わば、スピードに殉じたジミーの姿を、002の上に刻印しようとしたのではないかと思われる。

山西英一の翻訳が早川書房から刊行されているが、奥付によれば下巻が1956年8月、上巻が翌年の1月であり、後書も上巻に付されている。

タイトルの本書には、最もふさわしいものの一つというべきであろう。映画化は1976年、名匠エリア・カザンの最後の作品でもあるのも、なにか因縁を感じさせる。

『ラスト・タイクーン』については、ハヤカワ文庫（乾信一郎訳）角川文庫（大貫三郎訳）と文庫本で複数の翻訳が出ているのも、一般読者への普及という点からも大いに評価したい。読者アンケートに基づく角川文庫のリバイバル・コレクションの第二弾（1989年）の中に含まれて復刊されたのは、この作品の人気の高さを示しているものである。上述の『夢やぶられて』のような比較的地味な作品が、ハヤカワ文庫で版を重ねているのも（初版1972年、再版1990年）、フィッツジェラルドと映画界との関わりが、読者の興味を大いに惹起していることの証左であろう。

この角川文庫のリバイバル・コレクションは、全冊がメタリック・ゴールドのカバーで統一され、そのカバーに各作品の著者の写真が2センチ四方ぐらいであしらってあるという、洒落た装丁である。例えば、『映画の弁証法』であれば、エイゼンシュタインが、『ゲバラ自伝』であれば、チェ・ゲバラが、というふうに。『ラスト・タイクーン』のカバーに使用されているフィッツジェラルドの横顔の写真は、元来は『夜はやさし』の宣伝用に使われたものであるが、『20世紀英米文学案内・7』（研究社）や『完訳フィッツジェラルド伝』（こびあん書房）の口絵写真などにも用いられており、最も広く知られたものであろう。ただ、欲を言えば、晩年のシーラ・グレアムとでも一緒に写した写真であったならば、もっと効果的であっただろう。同じコレクションの『夜はやさし』では、1924年の南仏でのスコットとゼルダの写真が使っており、同書の第二篇の話などともうまく呼応しており、絶妙の選択と思われるからである。

(5) 『脱出』

陳腐な連想であるが、フィッツジェラルドとくれば、もう一度ヘミングウェイに登場してもらいたい。ただし、本書で選ばれている『武器よさらば』『陽はまた昇る』のように原作の雰囲気をついてできるだけ生かそうとした作品ではなく、原作と映画では大きく異なっているものとして、『持つこと持たぬこと』をワーナーがハワード・ホークス監督で映画化した『脱出』を取り上げたい。上述の如く、本書に『カサブランカ』が入っていないのは、恐らく一つの考え方であろうから、それを尊重して、ならば、もう一つの『カサブランカ』ともいえるべき、『脱出』を挙げたのである。ウィリアム・フォークナーが脚色に協力しているのも、本書の趣旨からいえば面白いだろうし、前項とも関連する。映画史的には、何よりもハンフリー・ボガートとローレン・バコールとの初共演とい

の表題では、『黄昏 — キャリー —』であつたらしく、映画の原題が、文庫のサブ・タイトルに影響を与えたようである。映画『黄昏』の制作・公開が1951年、角川文庫の刊行が1954年であるから、やはり角川文庫は、映画の公開に合わせたようであり（『ナタリーの朝』の項目、参照）、そのことは、題名からも窺えるのである。

(3) 『アンナ・クリスティ』

テネシー・ウィリアムズの諸作品や、リリアン・ヘルマンの『噂の二人』が採録されているのであるから、ノーベル文学賞の受賞者でもあり、二十世紀のアメリカ劇文学を代表するユージン・オニールの作品が収められていないのは、少々物足りない気がする。オニールの代表作の一つでもあり、死後に公開された自伝的作品『夜への長い旅路』を1962年にシドニー・ルメット監督で映画化した20世紀フォックス作品（キャサリン・ヘプバーンはアカデミー主演女優賞候補となる）が当時日本で公開されなかったのは大変残念であるが、ここでは、オニールに二回目のピューリッツァー賞をもたらせた『アンナ・クリスティ』を挙げておきたい。1930年のMGM作品の方で、監督はクラレンス・ブラウン、何よりもグレタ・ガルボのトーキー第一作として、極めて有名である。英語力・低い声で、トーキーへの進出が危ぶまれていたガルボは、アカデミー主演女優賞候補となる名演技を見せ、そのハスキー・ヴォイスは一層人々を魅了することとなった、映画史の上でも記憶される作品である。近年、廉価版のビデオ・ソフト（IVCV-3061S）が発売されていることも考慮したい。

(4) 『ラスト・タイクーン』

フィッツジェラルドの作品は二本取り上げられているが、わがままを言ってもう一本是非追加してほしいのがこの作品である。多額の借金を抱え、生活の立て直しを図ったフィッツジェラルドは、ハリウッドのシナリオ・ライターとして転進を図るが、こちらでも挫折する。この間の経緯は、バッド・シュールバーグの小説『夢やぶられて』に記されている。文学の世界での再起を図り、映画界の巨人であるモンロー・スターというプロデューサー（1920年代後半から30年代半ばにかけてMGMの黄金時代を現出させたアーヴィング・サルバーグがそのモデルであるとされる）を主人公としたこの小説に着手、新たな可能性を切り開きつつも志し半ばで死去する。『ラスト・タイクーン』は、ついに完成される事無く残されたのであるが、完成していれば、フィッツジェラルドの最高の作品となったのではないかと推測されている。様々な意味で、文学と映画の重要な結節点に位置する作品で、『映画で楽しむアメリカ文学』という

書が出版されるのは望ましいことである。その意味で、ハヤカワ文庫・新潮文庫^(注12)や、かつての角川文庫の役割というものを評価したいと思う。

なお、この作品は、児童のための世界名作全集の類にもしばしば取られてきたことも、日本人への普及という点では大いに重視すべきであろう。今日入手可能なものとしては、福音館古典名作童話シリーズ所収のもの（足立康訳、1993）などがあり、最新のものに講談社『世界の冒険文学』22（戸井十月訳、1999年7月）がある。福音館版には、N・C・ワイエスの挿絵が入っているのは嬉しい限りである^(注13)。

(2) 『黄昏』

セオドア・ドライサーの作品が『陽のあたる場所』一つというのは、やはり少々物足りない。ドライサーの小説は、物語の行方を見失っているような現代においてこそ、もっと評価されて然るべき作家であると思う。本書に取られているスタインベックの四作品、テネシー・ウィリアムズの三作品、マーク・トゥエイン、ヘミングウェイの二作品等々は、何れも選ぶべくして選ばれた名作ばかりだが、そうなるとバランスの上からも、ドライサーが一作だけではおさまりが悪く、もう一つの代表作である本作も取り上げてほしかったのである。1900年に刊行、時代を先取りした内容と表現は、当時猛反発を受けたという。20世紀も終わろうとする現在、読み返してみるのも一興であろう。1900年代はシスター・キャリーとピーター・ラビットによって開かれたと考えると面白いかもしれない。

映画化は、1951年パラマウントで行なわれ、監督が名匠ウィリアム・ワイラー、主演のローレンス・オリヴィエとジェニファ・ジョーンズという組合せも大変魅力的であった。翻訳も文庫版としては、早くに角川文庫の抄訳（絶版）があったが、1997年に岩波文庫版（村山淳彦訳）が刊行されて、読みやすくなった。

ところで映画の邦題というのも、先行するものを尊重してほしいものだ。四十以前の若い人にとっては『黄昏』というのと、ヘンリー・フォンダとキャサリン・ヘプバーンの（というよりは、ヘンリーとジェーンのフォンダ父娘の、といったほうが正確かもしれない）1981年作の映画（原題「On Golden Pond」）の方を想起するのであるが、私達の年代にとってはやはりこの作品である。同じ題名の名作がある以上、後発のものは邦題が重ならないように注意してほしいというのが正直な所である。猶、小説の原題は「シスター・キャリー」であるが、映画の原題は「キャリー」で、これはこれで、スティーブン・キングの作品では比較的早くに映画化され日本に紹介された、あの『キャリー』と混同しやすいので注意を要する^(注14)。因みに、未見ではあるが、角川文庫版

このようなものをお願いしたいという思いである。

まず、手始めに、アメリカ映画の大横綱格ともいうべき、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』が、選から漏れていることであるが、このことについては、編者の側の明白な意思の表明と思われるので、10本の中には含まない。「まえがき」で言及されているアメリカン・フィルム・インスティテュートのベスト100の中の「代表的な文学作品の映画化」の5作品のうち、この作品のみが本書からはずされているからである。ただ、アメリカ文学の専攻ではない素人読者としては、やはり、採用してほしかったものである。かつて世界文学全集の類が陸続として出版されていた頃、この作品は、しばしば、第一回、第二回あたりの配本に起用され、それだけ一般の読者を引き付けるものであったからである。映画史的にも、セルズニックにとっても、ゲートルやヴィヴィアン・リーにとっても、重要な作品であることは言うまでもない。同様の比喩を使えば名横綱格にあたる『カサブランカ』も、本書に含まれていない。この作品には、『みんながリックの店にやってくる』という原作があるが、本書で取り上げられている作家・作品とはやや異質であるから選ばれなかったのだろうか。あるいは、編者とリックの間で、この作品は二度と取り上げない約束でもあったのかもしれない。“Play it again, Sam”というわけにもいかないので、大いに未練を残しながらも、この作品も除外した。

(1) 『ラスト・オブ・モヒカン』

本書は、エドガー・アラン・ポーの二作から始めているが、文学史的にも映画との関連からも、やはりジェームス・フェニモア・クーパーから説き起こしてほしかったものである。別に、クリントン大統領の愛読書（ハヤカワ文庫の解説による）だからというわけではないが。

翻訳は、早くに橋本福夫訳『モヒカン族の最後』（早川書房、1950）があったらしいが（未見）、1992年の四度目の映画化（マイケル・マン監督、ダニエル・デイ・ルイス主演）にあわせて、ハヤカワ文庫（犬飼和雄訳）に収められて、読みやすくなった。映画と文学との関わりを考えると、このような波及効果というものは大いに重視すべきであろう。良書は常に入手できるような形であるのがあらまほしき姿であるのだが、昨今の出版事情・経済状況を考えると、現実には滅多にありえないのである。特に、外国文学の場合、一般の読者は翻訳に頼らざるをえないのであり、それが読みやすい形で提供されているか否かが普及の分かれ目となる。出版社の売らんかなの姿勢はやや気になるし、文学が映画の風下に置かれたようで、多少なりとも文学研究に携わっているものとしては割り切れない気持ちもないではないが、どのような経緯であれ、良

が改められる場合が多いので、外題よりも内題の方を重視するのであるが、現代の文庫本でもカバー題と内題が異なるばあいがあるのである。猶、手許にあるもう一冊の1996年（53刷）版ではカバーは従来のもと同じ写真を使用しているが、カバー上部のタイトルのみ「グレート・ギャツビー」となっている。ロゴなどは、従来のもと同色も形も全く同じで「華麗なる」の部分「グレート」と改めただけであり、新旧のカバーを並べて比較するのも面白い。細かなことを言えば、カバーの袖（折り返し）の部分が若干異なっている。「華麗なる」の方では、前袖に3葉、後袖に2葉、映画よりの写真を使用しているが、「グレート」の方では、旧版の前袖の写真3葉を後袖に回し、前袖はフィッツジェラルドの顔写真と略歴を掲載している^(注10)。映画の公開から20年以上たち、宣伝効果も多少衰えてきたために、フィッツジェラルドその人の魅力で購買層に訴えようとしたものであろう。これが映画化から更に年数が立てば、映画の写真そのものをカバーから外すことにもなる。角川文庫の『雨の朝パリに死す』は、従来エリザベス・テイラーとヴァン・ジョンソンの写真をカバーに用いていたが（手許には1983年8月版がある、1988年10月の34版までは確認できた）、がその後石倉ヒロユキのデザインカバー（手許には1996年6月の43版があるが、1991年6月の41版ですでに新しくなっている）に改められている。ハヤカワ文庫版の『ラスト・タイクーン』も、初刷（77年）ではCIC映画の主演ロバート・デ・ニーロの写真を正面に用いており、カバーの袖（折り返し）にも、前後各3葉のスチールを使用しているが、二刷（90年）ではこれらはすべて削除され、佐々木悟郎のイラストを使用した洒落たデザインのものに改められている。猶、初刷の前袖のスチールのうち2葉は、角川文庫（初版）のカバーの表と裏に使用されているものと殆ど同じ構図であるのだが、人物の視線など細部に微妙な相違があるので、比較してみると面白い^(注11)。

5、追加してほしい作品——もう一冊出してくれ、サム

本書を編纂する上で、最も大変であったのは、50作品に絞り込む作業であったかと推測される。全体のバランスを考慮して選出することでは色々と悩みもあったのではないか。特に限られた紙幅のなかで、涙を飲んで、選外とせざるをえなかった作品が多かったと思われる。そのようなご苦勞を承知の上で、敢えて、これらの作品は採用してほしかったというものを、10本あげてみたい。本当は、こちらも50作品あげたいくらいなのであるが、50本あげれば、51本目に未練が残るということで、切りのない作業となるので。勿論、本書に対する異見の表明などではなく、増補版や続編などの企画があれば、一読者としては、

房、1990)で指摘されている。また、「ミニ情報」の項目で、マッカーシズムとハリウッドの赤狩りの事に触れられている。ヘルマンとこの問題は、切り離して考えるわけにはいかないが、ヘルマンをあまりに偶像視するのは逆に危険である。ヘルマンの発言・行動が、ともすれば自己宣伝的、他者攻撃的と見られがちである以上、対立する立場の側の発言も取り上げて、バランスを取る必要がある(注8)。

4、偉大で、華麗な、グレート・ギャツビー

本書では、フィッツジェラルドの『The Great Gatsby』の翻訳書として新潮文庫『グレート・ギャツビー(ただし、このタイトルには注意を要する、詳しくは後述)』(野崎孝訳)、旺文社文庫『華麗なるギャツビー』(守屋陽一訳)の二種類を挙げるが、後者は早くに品切れとなっている。当該書には、他にハヤカワ文庫(橋本福夫訳)、角川文庫(大貫三郎訳)など、入手しやすい文庫本はほかにもあるから、一般の読者のためには、これらを掲出してほしかった。野崎孝の翻訳では、集英社文庫『偉大なギャツビー』もある。異種の翻訳を出来るだけ挙げるのならば、講談社文庫(佐藤亮一訳、現在品切中)の方も掲出すべきであろう。猶、朝日出版社の『アメリカ文学案内』の翻訳文献の項目(旧版『立体アメリカ文学』に増補された部分)では、講談社文庫のタイトルを、角川文庫の旧版と同じく「夢淡き青春——グレート・ギャツビー——」(1974)とするのは、ミス・プリントであろう。手許にある講談社文庫の第二版(1974年10月)では、「華麗なるギャツビー」のタイトルで、ロゴは映画日本公開時のものであり(後述の新潮文庫でも同じロゴが使われている)、カバー見返しには、同年、同題にて公開されたレッドフォード主演の映画の写真が使用されているから、この映画をあてこんで、タイトルも付けられたはずである。因みに、同じ講談社文庫で、同じ訳者で、前年に刊行された『雨の朝、パリに死す ほか五編』のカバー挿画は、佐伯祐三の「パリのカフェ」で、デザイン的にも大変すぐれたものであり、このスタイルが継続されなかったのは、やはり映画化ということがあったからであろう。

いささか些末なことに拘泥したのは、実はかつて新潮文庫版では、次のような奇妙な形の物があったからである。それは、表紙題、扉題、奥付の何れも「グレート・ギャツビー」なのであるが、ロバート・レッドフォードとミア・ファーローのギャツビーとデージーが手をつないでいるパラマウント映画のステールを使用したカバーでは、タイトルが「華麗なるギャツビー」と記されていたのである。手許には、1988年1月の第34刷がある(注9)。和本では、表紙

三部作の掉尾を飾る『眠れない時代 (Scoundrel Time)』も翻訳しているから、そのことに敬意を払っての事かもしれない。『眠れない時代』は、サンリオから1979年に刊行、1989年にはちくま文庫に収められた。文庫化にあたって、84年のヘルマンの死など、単行本刊行以後の出来事に言及した「文庫版あとがき」が添えられた他、「未完成の女」→「未完の女」、「ドルトン・トランボウ」→「ドルトン・トランボ」といった、多少の改訂がなされている^(注7)。

最初の回想記『未完の女』は1982年に稲葉明雄・本間千枝子の翻訳で平凡社から刊行されたが、第二の『Pentimento』は、その第3章のタイトルである「ジュリア」の方を邦題として、1978年に翻訳されている。『ジュリア』という書名や、回想記三部作の翻訳刊行年時から明白なように、映画『ジュリア』の公開がその原作の翻訳を促し、更にはヘルマンの他の回想記の翻訳の後押しをしたと思われる。『朝日新聞』1976年6月11日夕刊の『海外文化』のコラム(無署名)で、「怒りこめ『赤狩り』ふり返る女流作家」という見出しの下に、『悪党の時代 (Scoundrel Time)』がリトル・ブラウン社から刊行されたことをいち早く報じているが、そこでは、回想記第二作は原題の『Pentimento』そのままに『塗り残し』と訳されている。映画『ジュリア』の制作がなければ、恐らく翻訳書の書名もこのような形であっただろう。

さて、本書においては、『ジュリア』の翻訳書の項目では、パシフィカの中尾千鶴訳(1978年)と、早川書房の大石千鶴訳(1989年)が挙げられている。後者は、単行本ではなく、ハヤカワ文庫であるから注意を要する。前者の単行本そのものは未見であるが、ハヤカワ文庫版の「あとがき」によれば、パシフィカ版を文庫化したことがわかる。しかも「文庫化にあたり改訳」をしたとあるので、翻訳書の項目で前者を殊更取り上げる必要はなかったのではないか。本書では、同一人の翻訳は一種類しか挙げない方針であるようであるので、ここでもハヤカワ文庫版に統一すべきであろう。

ところで、『ジュリア』の「原作を読む上でのポイント」の項目で、「まったく別の女性の一生をモデルにして、ジュリアという人物像を作り上げたのではないかという議論」があるとしているが、これは、ミュリエル・ガードナーのことであろうか。更に、「ジュリアという女性は、ヘルマン自身になりたいと思ったすべてを兼ね備えた女性だという指摘もある」と述べるが、とすれば、ヘルマンの母親の名前が、他ならぬ「ジュリア」であることにも言及してほしいところである。猶、ヘルマンの回想記では、常にモデル論、虚実の混在、前後矛盾の問題等が指摘されるが、『ジュリア』そのものについては、パリからモスクワへのルートや、その旅行が行なわれたのがナチ支配下であるのか否かなどの問題があることが、陸井三郎『ハリウッドとマッカーシズム』(筑摩書

「戦場よさらば」で立項しなければならない。またパラマウント版では、本書の記載のように主人公は一人で湖を渡るのであるが、フォックス版では、ヘミングウェイの原作どおりに、徒歩でホテルに帰り、原作どおりの幕切れが印象的であったと、石一郎は述べている^(注6)。

更に言えば、ゲーリー・クーパーのイメージとしては、この作品の主人公のフレデリックよりも、『誰がために鐘は鳴る』のロバート・ジョーダンの方がぴったりで、あちらはクーパー自身の人間性と通じるところもあって、まさにはまり役と言うべきであろう。イングリッド・バーグマンの人気とも相俟って、ヘミングウェイ原作・クーパー主演の映画として、大部分の日本人が真っ先に思い浮べるのは『誰がために鐘は鳴る』の方であろう。勿論、映画作品としてもなかなかの出来であるのは言うまでもない。従来的一般公開版（CIC、USL 30006など数種が出ている）以外に、「幻の35分」を加えたワールド・プレミア版（同、USL 40318～9）のビデオ・ソフトも発売されているが、これなどもこの作品の根強い人気を示すものであろう。

3、『噂の二人』と『ジュリア』の翻訳をめぐる

リリアン・ヘルマンの原作としては、上記の二作品が取り上げられている。これらについて、翻訳文献の項目を考えてみたい。一体、外国文学を翻訳で読もうとすると、単行本、文庫、世界文学全集の類の何れかのものを利用することになろう。文学全集といっても、新潮社、筑摩書房、河出書房、集英社等々が、それぞれ複数のシリーズを出しているから、世代によって、どの社のどの版を読んだか、所蔵しているか、が異なってくる。本書では、恐らく入手しやすさという点に眼目を置いたのであろう、文庫を中心として掲出しており、大変有り難い。また、複数の異なった翻訳がある場合は、それらを併記してあるのは、非常に有益である。『若草物語』では松本恵子訳など五種類のものが、『ハックルベリーの冒険』では村岡花子訳など四種類のものが示され、親切この上ない。翻訳で読むものにとっては、複数の訳を比較・選択できるのは本当に有り難いものである。たとえば、清水俊二の文体のフリップ・マーローと田中小実昌訳のものとは、別人かと思われるほど印象が異なるのであるから。

『噂の二人』（映画の原題は「The Loudest Whisper」）の原作である『The Children's Hour』の翻訳としては、新水社・小池美佐子訳の『子供の時間』（1980）があげられているが、ここでは新潮社・小田島雄志訳『リリアン・ヘルマン戯曲集』（1995）も合わせて掲出してほしかった。今日では、後者の方が一般には入手しやすいからである。尤も、小池美佐子は、ヘルマンの回想記

ともこの本に言及してほしかったものである。

主演者の名前の選択について、関連して述べたいのは、『エデンの東』の項目である。ジェームス・ディーンとジョー・ヴァン・フリートの名前を挙げているのは如何であろうか。確かにジョー・ヴァン・フリートは、この映画でアカデミー助演女優賞を獲得してはいるが、この映画の魅力の一つは、ジミーとジュリー・ハリスの二人の瑞々しさにあるのはいうまでもない^(注3)。したがって、主演者としては、当然この二人を挙げるべきである。何よりも本書『映画で楽しむアメリカ文学』のカバーには、ジェームス・ディーンとジュリー・ハリスの二人の写真を使用しているのであるから。

2、『戦場よさらば』と『武器よさらば』

本書では、1932年のフランク・ボーゼイジ監督、ゲーリー・クーパー主演のパラマウント版の映画の方が紹介されている。しかし、1958年に制作されたチャールズ・ビドア監督、ロック・ハドソン主演、ジェニファ・ジョーンズ共演の20世紀フォックス版の大作の方が、映画の全盛期に公開されたこともあって、多くの日本人にとっては、馴染み深いのではないかと思われる。複数回映画化されている作品の場合、どれを選ぶかは基本的には趣味の問題であるが、芸術性と同様に、一般によく知られているのはどれかということも押さえておく必要があるであろう。NET（当時）の日曜映画劇場は、淀川長治の名解説もあって、テレビの映画劇場が続出するきっかけとなったものだが、ここで二度に互って取り上げられたのもフォックス版の方であるし^(注4)、文学との関連で言えば、中学生などを対象とした抄出版の世界の文学の代表格として現在でもよく読まれている、金の星社の『ジュニア版世界の文学』でも、カバーに使用されているのはやはりロック・ハドソンの写真なのである（1967年1月初刷、1999年2月28刷）。従って、是非フォックス版にも言及してほしかったものである。

何よりも、パラマウント版の日本公開時のタイトルは「戦場よさらば」であり、「武器よさらば」の題名で劇場で上映されたのは20世紀フォックス版の方なのである^(注5)。本書は、二度以上映画化されている文学作品を取り上げる場合は、当該版の上映時の映画の邦題で項目を立てているようである。たとえば、通常「緋文字」の邦題で読まれているホーソーンの『The Scarlet Letter』は、デミ・ムーア主演の1995年版を取り上げるので「スカーレット・レター」の題で掲出する。リリアン・ギッシュ主演の方は「真紅の文字」であった。『モルグ街の殺人』も、1954年版であるので「謎のモルグ街」として掲出する。従って、統一性を保つためには、フォックス版を取り上げるのならば、当然

こしい変更をしたのか。これでは、リズはベスだが、ベスではない、という禅問答になってしまうのである。

実は、オールコットの原作では、三女のベスが音楽の好きな病弱で内気な少女であり、そのやさしさが隣家の気難しいローレンス氏とも心通わせるに到るエピソードなどが描かれ、やがて姉のジョーのロマンスのきっかけを作り、一方四女のエミイの方は絵の好きなおしゃまな少女として造型されている。これを映画の方では、エミイとベスの性格・役割はそのままに、三女と四女とを原作とは完全に入れ替えているのである。キャスティングから考えると上手な変更であるが、原作のベスのイメージ、エミイのイメージが印象的であるので、名前と性格は変えずに、三女と四女を入れ替えたのである。従って、本書の「この映画の見どころ」の項目で、「素直で美しい心を持つ三女のベス」とあるのは「四女」と改めなければならない。単純なミス・プリントかもしれないが、何よりも「原作と映画が大きく異なっているところ」の項目では、この問題を取り上げてほしかったものである。因みに、ウィノナ・ライダーがジョーを演じた1993年版の『若草物語』では、あのジュリエットの、コゼットのクレア・デーンズが、原作どおりのやさしい病弱な三女のベスを演じている^(注1)。

本書では、当該映画について、監督、制作年、脚本、主演者、上映時間のデータが添えられている。必要な情報が簡潔にまとめられており大変有り難い。このうち主演者については、どの映画でも二人の名前を挙げることで一貫している。作品によっては、二人に絞るのが困難であったりするものもあろうが、概ね妥当な人選がなされている。ただ、本作品に限っては、主演者のジューン・アリスンについてマーガレット・オブライエンとしたのは、他の選択の余地もあったのではないと思われる。クレジットの二番目は、ピーター・ローフォードであり、ジョーとローリーの恋をこの物語の縦糸と見れば、これはこれで穏当な配列である。一方、日本での公開時（制作から十年以上遅れる）の著名度から言えば、当然エリザベス・テーラーであろう。また長幼の序を重視すれば、メグ役のジャネット・リーという選択もあり得る。因みに、現在市販されているワーナー・ホームビデオ（WV-50805）のパッケージでは、ジューン・アリスン、エリザベス・テーラー、ジャネット・リーの順に三人の名前を挙げる。豪華な配役陣ゆえのぜいたくな悩みではあるが、現時点から振り返ってみれば、映画史的には、二番目にはリズの名前を挙げるのが妥当な所ではないか。ブレンダ・マドックスの『エリザベス・テーラーなんかこわくない』という評伝が、翻訳、文庫化（1997年、文春文庫）されていることから窺えるように、まだまだリズは別格の地位にあるのである。本書のエドワード・オールビーの『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』^(注2)の項目では、ミニ情報の部分で、是非

『映画で楽しむアメリカ文学』を読む

田 坂 憲 二

最近『映画で楽しむイギリス文学』という本が出版された（金星堂、1999年5月刊、A5版、250ページ）。本学文学部の吉田徹夫教授、村里好俊助教授他の共編著になるもので、映画化されたイギリス文学の代表的作品を50本取り上げ、「原作者について」「原作のあらすじ」「原作と映画と大きく異なっているところ」「映画のみどころ」「原作の背景」「原作を読む上でのポイント」「ミニ情報」などに分かち、文学と映画の両方から観賞のポイントを簡潔かつ的確に示したもので、英文学科の専攻生にも、一般の読者にも有益かつ興味深い書物となっている。筆者も、同書を大変面白く読んだ一人である。そのため、後日書店で同書の横に姉妹篇である『映画で楽しむアメリカ文学』を見いだすと、迷わず購入、直ちに読了した。こちらも、前書に劣らず、なかなか面白いものであった。ただし、専門外の素人の読者の立場からすれば、後書には多少意見を申し述べたい部分もある。これら二冊のように面白い本を読むことが出来たことへの感謝の念もあり、『映画で楽しむアメリカ文学』を讀んでいささか考えたことを、以下に述べてみたい。

1、『若草物語』の姉妹たち、リズはベスではない？

『若草物語』の映画化は、1933年のキャサリン・ヘプバーン主演のものもあるが、本書では、オールスター・キャストとして有名な、1949年のマービン・ルロイ監督作品を取り上げている。この映画で三女の役を演じたのは、エリザベス・テーラーであり、原作では三女の名前はベスであるから、役名と俳優の名が一致しているはずであるが、実はそうではない。それは、この映画では、三女と四女の名前が入れ替わって、三女がエミイで四女がベスとなっているためである。三女にエリザベス・テーラーを起用しながら、なぜこのようなやや